

まちなみ デザイン 逗子

みんなで景観を考える本

企画・制作＝ほととぎす隊景観部会＋逗子市まちづくり課



はじめに

逗子に住んでいるみなさん、これから逗子に住みたいと考えているみなさんは、きっと逗子の自然やそこに流れるゆったりとした時間に魅力を感じていらっしゃるのではないのでしょうか。

しかし、残念ながら、近年、貴重な自然環境を破壊する開発や逗子の風土・景観を損ねる家づくりなどにより、どこにでもある雑然とした住宅地と化してきています。

景観は山や緑、水辺などの自然的な要素と住宅や商業施設などの建築物、橋・道路などの人工構造物からつくられています。

「青い海とみどり豊かな平和都市」を宣言する逗子ならではの、豊かな自然とまちの暮らしが融合した住環境を再構築し後世に残していくためにも、私たち市民自らが考え、行動を起こし、守り、育てることが求められています。

この冊子は、逗子の景観を考えるために集まった市民有志と行政が、逗子の各所を巡り、対話を重ねてきたものをまとめたものです。これから私たち自身でより良いまちなみをつくるためにできることはなにかを考え、心地よいまちなみをつくるヒント集でもあります。

自分たちでできる身近なことから始めませんか。小さな活動の集積が、地域に広がり、蓄積され、共有されることで住みよい素敵なまちなみになることでしょう。

ひとりひとりの小さな活動から心地よく、美しく、住み続けたいまちをつくるために、私たちのまちなみデザインは始まります。

ほととぎす隊景観部会+逗子市まちづくり課

目次

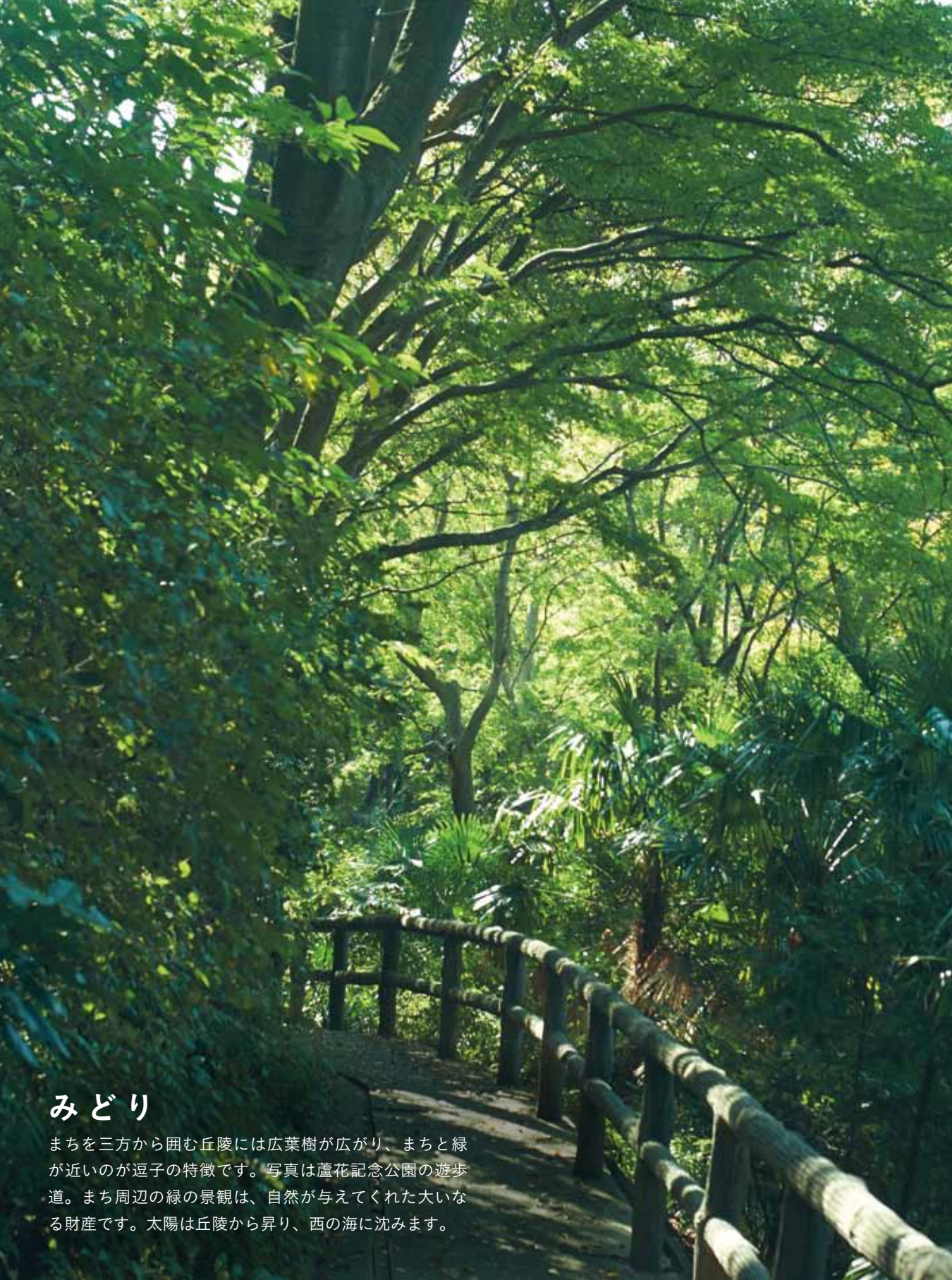
逗子の景観	02
逗子の景観の特長と歴史	10
大切にしたい逗子のまちなみ	12
私たちの実践	22
実践のヒント	36
ほととぎす隊景観部会・市役所ができる景観サポート	44
ほととぎす隊景観部会について	46
おわりに	47



うみ

西に開かれた、遠浅で穏やかな逗子海岸は、スケールは小振りでも開放感にあふれ、四季折々の楽しみ方があります。晴れた日には江の島越しに富士山、伊豆半島を望む、逗子ならではの景観を生み出しています。





みどり

まちを三方から囲む丘陵には広葉樹が広がり、まちと緑が近いのが逗子の特徴です。写真は蘆花記念公園の遊歩道。まち周辺の緑の景観は、自然が与えてくれた大いなる財産です。太陽は丘陵から昇り、西の海に沈みます。



かわ

丘陵を源として市内を蛇行して流れる川は、上流から下流まで、さまざまな景色を見せてくれます。上流で目にする蛍、鴨やサギが訪れ、大きな鯉の泳ぐ川を見るのは楽しく、岸辺の家や橋などの構造物と自然が美しく融合する水辺は魅力的です。

まちなみ

明治期から別荘地として栄え、さらに住宅地として発展してきた逗子のまちには低層住宅が建ち並び、自然と人の暮らしが融合する景観をつくりだしています。



にぎわい

まちは人よりも長生きです。まちには変わり続ける人々をずっと見守ってきた場所や建物がたくさんあります。逗子のまちなかにある亀岡八幡宮はそんな場所のひとつです。初詣から季節折々の祭、多彩な市場までさまざまな人々が集まります。人々が集う風景もまた、景観を生み出す大切な要素です。楽しく暮らしている人がいるまちには魅力があふれています。



逗子の景観の特長と歴史

逗子市は、神奈川県東部の三浦半島の付け根に位置し、鎌倉市、横浜市、横須賀市、葉山町と境を接しています。北、東、南の三方を丘陵に囲まれ、西の相模湾に向かって開けた形をしています。逗子湾は幅約800mの小さな浜辺です。そこに流れ出る田越川、久木川が奥深く、細かいひだのような谷戸を形成しています。

谷戸には行き止まりの道が多く、住宅地は斜面緑地に囲まれた静かな雰囲気の小ぢんまりした界限に分かれています。また、平野部の道も小さな路地が網目状に入り組んでいます。

1889(明治22)年に横須賀線が開通するとまちは保養地として栄え、海岸沿いには松並木に囲まれた別荘建築が建ち並びました。

その後、逗子の景観は短い期間で大きく変化してきました。それは、逗子のまちづくりの歴史、発展の歴史と言えますが、一方で、景観破壊の歴史という側面もあります。

1964(昭和39)年、東京オリンピックの開催にあわせ国道134号線が建設され、それまで住宅地と連続していた逗子海岸が隔てられました。逗子湾から浜伝いに散歩できた鐙摺(あぶずり)の磯は1967(昭和42)年から埋め立てられ、浄水管理センターが、1971(昭和46)年には小坪の磯が埋め立てられ、逗子マリーナが建設されました。1989(平成元年)年には多くの人に親しまれた渚ホテルが解体されました。もはや、古い別荘建築はほとんど残っておらず、住宅地は小さく分割され密集化が進んでいます。緑は減少し、昔は豊かな松林だった逗子海岸周辺に残った松はごくわずかです。河川はコンクリート護岸となり、遊べる場所は少なくなりました。

逗子のまちなみが過去に大きく変わってきた要因には、経済発展や人口増加などの都市機能の拡充がありました。現在、人口が緩やかに減少し、環境問題がより重要視されているなかで、逗子のまちなみをより良くデザインしていくために私たちにはなにができるのでしょうか？



逗子市
面積=17.34km²
人口=5万7,868人(2013年)
世帯数=2万4,089世帯

大切にしたい逗子のまちなみ

景観は、もともとある自然と、人によって作りだされたものが複雑に混じり合っています。

逗子の景観を意識して見てみましょう。

これからも大切にしていきたい逗子のまちなみが見えてきます。



路地

狭い路地がまちを形成しているのが逗子のまちの大きな特徴。道幅が狭い場所が多いため、崩落の危険のあるブロック塀ではなく、生垣や低い塀などのほうが安全でもあり、路地の良さを活かします。路地の魅力を増すことが、逗子の景観を魅力的にします。

■ 路地のまちなみ

逗子には、車が通ることが困難な狭い路地が多く存在しています。路地を歩くと逗子のまちの良さを実感することができます。路地は車が少なく高齢者も子どもも安心して歩くことができます。低層の住宅地の生垣や屋根の向こうには緑の丘陵を眺められ、市内を蛇行して流れる川が路地と一体になり、周辺環

境を豊かにしています。路地は最も親しみやすい、貴重なコミュニティスペースだといえます。

逗子は人々が行き交うには程よいスケールをもったコンパクトなまちです。また、公共交通機関が充実しているメリットもあり、自家用車を使わずとも快適に生活できることが特徴です。逗子では、歩行者と自転車を優先した生活スタイルがしっくりきます。

家とみどりの風景

丘陵に囲まれているため、逗子の景観は自然と切り離せません。勾配屋根は風土に適していると同時に、ふと見上げたときに山の稜線と調和している風景が心地よく感じられます。低層のまちなみは、日当たりや風通しの良い居住環境をつくっています。



■暮らしが生きるまちなみ

まちなかに住民が集えるパブリックな公園が数多くあることが望ましいのですが、市内にそれほど多くないのが現状です。しかし、それを補うように川岸や路地の脇に設えられたベンチや井戸などが見られます。これらの多くは、個人が私有地を開放した事例です。こうしたスペースが少しずつ増えることで、まちなみにゆとりが生まれます。個人でもできるちょっとした工夫がたくさんあるまちなみは、とても素敵です。この本では誰でも身近に始められるまちなみデザインについて紹介しています(p36参照)。

■海辺とまちなみ

すべてにおいてコンパクトな逗子ですが、開放感を味わえる場所もあり、その代表が逗子湾から眺める海辺の広がりではないでしょうか。晴れた日には江の島越しに伊豆半島、富士山を望むことができる海岸には、多くの人が日々散歩に訪れます。

全長約800mという程よい大きさで遠浅の逗子海岸は、市民の憩いの場として親しまれ、夏の海水浴や、さまざまな海辺のイベントも開催されるなど、多目的に利用されています。逗子海岸は、多くの市民に愛されているコミュニティスペースだといえます。

残された海辺周辺の公共的なスペースを有効にしつつ、海辺に続く道を災害時などの避難に対応した、より公共的で快適なものにしていくことが重要です。

川のある風景

海から吹く風は川面を伝わり、谷戸の奥まで流れていきます。通り抜ける風が天然のエアサイクルを生み出しているのです。ホタルも生息する美しい川沿いは、風景を眺めながら安心して歩くことができます。川遊びができる場所、護岸・橋のデザインなど、川と親しめるしつらえがますます必要となるでしょう。



海辺の風景

逗子海岸は、逗子市民にとっては日常的に海と親しめる場であると同時に、人と出会ったり散策したり、イベントを楽しんだりできる大切なパブリックスペースであり、コミュニティスペースです。



海に近い生活空間

小坪漁港には、新鮮な海の幸を扱う魚屋や地場の海産物をふるまう飲食店が、マリナーなどのリゾート施設と共存しています。国道134号線で分断されないこの場所は、海辺と近い生活を満喫することができます。





丘陵

丘陵は逗子の景観の根幹です。これ以上丘陵を削って人工物をつくることは、逗子の良さを損なうと危惧されます。安全を守るために崩れそうな崖を保護する場合でも、コンクリートではなく、自然を感じられる仕上げにするなどの配慮をしたいものです。

交差点と角

路地の多い逗子では、交差点の見通しが悪くなりがちです。見通しを良くするために、敷地の角を「隅切り」している例があちこちに見られます。さらに角に緑があると景観のポイントにもなります。



自然公園とハイキングコース

逗子には、住宅地からも近い大崎公園や披露山公園、盧花記念公園、久木大池公園などの自然公園があります。また、神武寺や二子山にはハイキングコースがあるなど、日常生活と自然が近いところに魅力があります。



まちなかのコミュニティスポット

まちのそこそこにあるベンチは、単に休憩するだけでなく、まちを眺めたりおしゃべりをしたりできる大事なスペース。住宅地の中の井戸は災害時の大切な備えでもあり、地域の大切なコミュニティスポットとしても活かされています。





境界のデザイン

道端や小さな空き地、家の周囲や放置された空間などは、実は大切な景観の要素です。美しく掃除されていたり、草花が植えられるなどのちょっとした気遣いが気持ちの良い景観をつくっています。



生垣

路地でいちばん目立つのは塀や柵ですが、逗子には緑をしつられている家々が多く、その連続する生垣が、路地の個性をつくり出しており、山から住宅地、そして海へと緑をつなげる役目を果たしています。



まちなかの樹木

街路樹やシンボルツリーなど、まちなかに木々があることは、空気が浄化され、風通しも良くなり、見た目も心地よいものです。それだけに、古い樹木を宅地造成や建て替えのために切り倒してしまうことがあるのは残念でなりません。樹木はその地域の歴史と風景をかたちづくる大切な要素です。



継承したい伝統建築

古くから継承されてきた伝統建築の優れた要素を取り入れ、現代の暮らしと家づくりに反映させることは、逗子の歴史・文化を継承した景観まちづくりのために大切なことです。建物のみならず、門構えや庭づくりにも自然素材を活用している例や、街路に日陰をもたらす塀越しの樹木や門前の緑のしつらえなど、新しい家づくりの見本にしたいものです。





商店街

JR返子駅前の中心市街地は、高層建築や大規模店舗がなく、小ぢんまりした良さがあります。観光地や大型都市のように混雑でストレスを感じることなく飲食や買い物を楽しむことができます。



まちの交流拠点

地域住民が日常的に交流できる場所が徒歩圏内にあることが理想であり、住宅地に点在しているカフェがその役割を果たしているところもあります。小坪にある「南町テラス」は、神奈川県「まちの駅」に登録されていて、住民や来訪者が休憩や地域情報を収集することのできる公共的空間です。



コミュニティ活動

駐車場でのガレージセール、海岸でのイベント、神社の境内での市場など、まちのあちこちで人々が楽しみに活動している風景は、まちに活気をもたらしています。



■まちなみに大切なこと

これまで見てきたように、大切にしたい返子のまちなみの特徴は、それぞれが「小さい」要素で出来ているということです。

狭い路地、路傍のしつらえ、低層の家並み、商店街や住宅地の小規模店舗が集まる中心市街地、宅地内の緑地と背景の丘陵、地形から織りなす谷戸、河川や湾、海岸や磯、漁港や森など、これらの小さくて美しいまちなみの要素を身近に楽しめることが、返子らしいまちなみに通底する魅力をかたちづくっています。

さらに、小さなコミュニティがさまざまな地域活動を行っていることで、まちの魅力を高めています。返子で美しい景観を創出するさまざまな活動をされている方が沢山おり、この本でもその一部を紹介しています(p22参照)。小さな活動であっても、みんながそれぞれに取り組めば、それらがいずれ一体となり、大きく結実する可能性があります。

返子は古くから各地域がそれぞれ異なる特性を持っており、一律の画一化されたデザイン手法をとるのではなく、異なる特徴に応じたその場所にふさわしい「まちなみデザイン」を、地域住民の手で実践していくことが理想だといえるでしょう。

地域住民が家から歩いて集まることがで

きる近さに拠点をつくり、そこで地域活動を行い、それぞれの条件に応じたまちなみデザインを推進することができれば、より良い返子の将来像を、市民の手で実践していくことがより具体的になっていくでしょう。すでに、住宅地の中にある小さなカフェや店舗が、それに似たコミュニティスペースになっている事例も見られます。

■これから、大切につくっていききたい返子のまちなみ

独自の高い理想を掲げている返子ですが、道路の拡幅、斜面の造成や開発、コンクリート護岸工事や小規模住宅の開発など、まだ従来型のまちづくりが進められています。家なみのひとつひとつがみんなで共有する風景の大切な一部であり、周囲に配慮して家づくりをするという日本の伝統的な意識も薄れています。

今後、人口減少時代を迎える社会において、まちなみデザインはこれまでの都市機能を拡張する考え方から大きく方向転換するべき時期にきています。

専門家や行政も一緒になって、コンパクトな良さのある返子だからこそできる新しいまちなみデザインの仕組みを、協働でつくりだし、実現していくことが、いま私たち市民にも求められています。

私たちの実践

公共のスペースを美しく保全する活動から、個人宅でできることまで、まちなみデザインを実践している人たちが逗子には大勢います。そのいくつかをピックアップして紹介します。

■ まちと緑を考える

「まちがこうなったらいいな、と思うことから始まります」

逗子市には披露山公園、大崎公園、盧花記念公園、桜山中央公園など、市民から親しまれている公園があります。「共生95」は、その清掃と整備などを行うボランティアグループ。設立のきっかけは、1995年度に社会福祉協議会が主催した講座「おとうさん手伝ってよ!」。その受講者で発足したので、現在も会員は男性のみで35人。「まずは汗を流そう」をモットーに、公園の清掃と整備、そして高齢者や障害のある方々の個人宅の草刈りや庭木の枝払いなどを行っています。「公園は芝生や木を植えただけではだ

め。年間を通した手入れがあって、初めて良い公園になるんです」と会長の富田邦衛さん。開成中学・高校の生徒たちの公園ボランティア体験の指導や、自治会による緑化活動のサポートもしています。「自治会活動が根づいていない地域は緑が放置されがちですが、みなさんなんとかしたいと思っているはず。行政だけでは目が行き届かないので、自治会やボランティアなどを通して、地域の景観や緑を大切にしたい愛着のあるまちづくりのためのお手伝いもしていきたいです」(緒方哲男さん)。「地域の公園は、そこに住んで利用している皆さんが協力して自主的に清掃活動をしてほしいですね」(水留亨さん)。「まちに愛着を持ち、こうだったらいいな、きれいにしたいな、と思うことからまちづくりは始まるんです」と富田さんは言います。



共生95
左から水留亨さん、会長の富田邦衛さん、緒方哲男さん。富田さんと水留さんは発足当時から、緒方さんは若手の新メンバー

上：雑草や藪を刈り、隅々まで手を入られた美しい公園
左：海が見える高さに刈り込まれた植え込み
右：草刈りや枝払いなど、あちこちで手を入れる。週に一度は大崎公園の手入れを行っている



道路アダプト・小坪
左から岩本靖枝さん、小田切和子さん、田中晴美さん。「以前はソテツばかりでした。花の好きな方が苗をくださって、それを増やすことから始めました」(岩本さん)

散歩を楽しむ人たちが腰掛けて談笑したりもする場所。男性サポーターも増え頼もしいとのこと



■ 環境美化の活動

「まちをきれいにすれば、人の気持ちもゆったりしますね」

市民と行政が協働で進めるまちの美化プログラムのひとつに「アダプト・プログラム」があります。逗子では、小坪のボードウォークや亀ヶ丘バス停前の花壇などの手入れをしているのが道路アダプトに関わる方々です。

小坪のボードウォークでの花壇に岩本靖枝さんたちが花を植え始めたのが1998年頃。小坪区長から花の水やりを頼まれたのがきっかけだったそうです。大好きな庭仕事の延長として、小田切和子さんとふたりで始めたアダプト活動ですが、次第に花好きな人が集まり、いまでは5人。月2回、活動しているそうです。「散歩をする方や観光客の方々が花壇の緑に腰をかけて休んでいるのを見るのはいいものですよ」と岩本さん。美しい花壇は景観をつくるとともに、くつろぎの場所にもなっているようです。

一方、亀ヶ丘バス停の花壇の手入れが始まったのは20年近く前。現在は4人のメンバーが毎週土曜の朝に世話をしています。代表の信太キヨさんによると「当時、ここはポイ捨てのゴミでとても汚かった



道路アダプト・亀が岡
左から福岡紀子さん、関幸恵さん、岡登弘志さん、信太キヨさん。「ボランティアなので参加できないときははしなくてもいい。そうじゃないと続かないと思います」(福岡さん)



上：季節感を大切に、花を植えている。バスを待つ人たちもなごむ花壇
下：年に2回、市役所から花の苗が配布される

のです。通学路でもあるし、きれいにしたいと思ってゴミ集めから始めました」。しばらくはメンバーが花の苗を買い、季節ごとに植え変えていたそうです。その後、小坪区会からも苗の購入費用が援助され、市からの花の苗の配布もあり、花の絶えないバス停になっています。「苗をくださる方、アドバイスしてくださる方、小坪区会、喜んでくださるみなさんによって花は咲いています」(信太さん)。

自分たちの暮らす地域をきれいにしたいという思いから始まるアダプト活動、どちらも道行く人を和ませてくれる、景観の美化活動です。



石井達郎さん
山の根在住。地域デビューのきっかけは銀行を退職後の近所のマンション建設反対運動。60代にまちづくりに参加してもらおうと、2013年には「ずし60's」も立ち上げた

上：緑色に統一されたパラソルがきれいな「コミュニティパーク」では、クッキーやパン、軽食、雑貨などの出店のほか、NPOの発表やトークや音楽ライブも開催。すっかり市民の馴染みのイベントだ
下：年1回行われる川の清掃では、子どもから大人までがお揃いのTシャツで一斉に行う。「親水施設がもつとあるといいですね」（石井さん）



■人のつながりが景観を変えていく

「視点を変えてまちを眺めるといろいろなことがわかります」

「僕は山の根に住んでいるのですが、そこで以前、マンション建設反対運動があったんです。自然環境が気に入ってここに住むことにしたのにと僕自身は思いましたし、建設されると風通しが悪くなったり、森がなくなったりするという近隣の人々の思いがあって反対運動が起こり、結局、住民が勝って、マンションは建てられず、建設予定地の土地を市に寄

付して、アダプトで我々住民が管理しています」と語るのは石井達郎さん。石井さんは、この反対運動がきっかけとなり、現在は、田越川の上流から下流までの一括清掃や亀岡八幡宮境内で年2回開催する「コミュニティパーク」の運営にも関わっています。

2013年5月に行われた川の清掃では、逗子の企業や行政、流域の自治会も含めた“オール逗子”に、開成中学や聖マリア小学校の生徒も参加し、総勢730人。「いま大事なのは川をきれいにすること。掃除するときに降りてみると目線が違うじゃないですか。そうすると気づくことがいっぱいあります。降りてみてわかるのですが、親水施設がほとんどないんです。景観上もあれでいいのか、という印象はありますね。生態系にとっても必ずしも良くないかもしれない。安全面は考えなければなりません、川のあり方をまち全体で考えると、なにかいい方法があるのではないか、という感じは持っています」。

亀岡八幡宮の境内では、コミュニティパークだけでなく、植木市や祭りなどさまざまなイベントが行われています。人が集まるところにはなにかが生まれる。人のつながりから新しい価値が生まれるので

はないか、と石井さんは言います。コミュニティパークは逗子だからその花やガーデニングなどをテーマに、緑のテントが並び、ステージでは演奏やトークが行われ、道行く人も出展者も楽しむイベントとなっています。

「亀岡八幡宮は古い神社ですが、いまの世話人代表の方が20年くらい前から神社の手入れをしてきて、圧倒的にきれいに蘇生したんです。きれいだからなかできたらいいなと思うし、人も集まる。コミュニティパークだけでなく、ここではいろいろな催しものも行われています。“守る”というと滅びるものを保持するという感じがありますが、八幡宮は価値を増した例だと思います」。



上：家の修繕については素人ばかり。でも続けることで全員が上達したそう
下：緑豊かな蘆花記念公園内に建つ旧脇村邸。内部には入れないが庭の散策はできる



旧脇村邸アダプト
会員は男性ばかり20人ほど。「雨が降らない限り週に1回集まり、通常作業後、昼ご飯を食べながらさまざまな話題で談論発。これが楽しい。気楽に無理をしないのが、活動を長続きさせる秘訣です」（野口さん）

■歴史的建造物を保全する

「楽しみながら、まちに緑を増やしていく」

桜山の蘆花記念公園の一角にある旧脇村邸は、昭和9年に建てられた和洋折衷の別荘建築。国の登録有形文化財及び逗子市景観重要建造物に指定されています。現在、邸宅内部は一般公開されていませんが、毎週風を通し、補修や掃除、庭の整備が続いているのが旧脇村邸アダプト。「旧脇村邸の庭は閉じられた空間ではなく山から続く庭。庭の周囲はシイ、カシなどの常緑広葉樹林で、逗子で毎年激減していく貴重な屋敷林の景観です。ただ、庭内に女性の好む花が少ないので、ユキヤナギ、レンギョウ、ドウダンツツジ、ヤマザクラ、ツツジ、サツキ、クチナシなど、日本の花を植えてきました」と代表の野口宗一さん。庭の裏手で育苗は、ドングリから育てた広葉樹の苗木で、これまで小学校にいのちの森として植樹してきたそうです。

「まちに緑を増やすと同時に、将来は広葉樹の木々が鎮守の森となり、もしもの火災のときには市民を守ってくれるはず」（野口さん）。建物保全だけでなく、逗子の自然環境を育む場所でもあるようです。

■ 教育とまちなみ

「塀を低くしたことで、
学校もまちなみに溶け込んでいきます」

逗子海岸からほど近い逗子開成中学・高校は、神奈川県下では最も古い私立の男子校です。この学校には、よくあるブロック塀や囲いが見当たりません。「僕が教師として赴任した30年ほど前は、高い壁に囲まれたとても閉鎖的な学校でした」と高橋純学校長。閉鎖性を憂いた当時の学校長が壁を取払い、松や桜を植栽して、景観を整備したのが1996年のこと。「当時に比べたら、灰色っぽかった学校がずっと明るく



なりました」。

とはいえ、学校は基本的に関係者以外は立ち入り禁止の場所。そこをどう工夫したかという、「低い壁に植栽をたくさん植えることで、外からは中が見えるけれども、普通の感覚の人ならば入りにくいようにしたんです。もちろん、時間になったら門は閉めますが、この開放的な感じが、逗子の海岸のイメージや、元々別荘地だった周囲の環境ともマッチしていると思います」。春には桜が咲き、秋には銀杏が色づく。「近隣の人たちも楽しみにしてくださっています。学校としても景観の面でも地域に寄与したいですね。前任者たちがずっとやってきたことが、いまうまく周囲に溶け込んできていい感じになってきているのだと思います。それを守っていかねばと思っています」。また、2003年の創立100周年を機に、耐震化も兼ねて校舎をリニューアルし、やはり、海にも近い学校というイメージに合わせ、エントランスもウッドデッキに変えました。「景観との因果関係はわかりませんが、うちの生徒は明るいし、のびのびしているし、素直な感じですよ。昼休みには海に行ってもいいことになっているんですよ」。

逗子開成では全員が年に一度、公園や海岸、川、通学路などの清掃ボランティアに参加しています。

上：道路と学校を隔てる塀は低く、まるで大学キャンパスのような開放感がある。基本的には関係者以外立ち入り禁止だが、緑豊かな学校を外から眺めるのは気持ちが良い
下：校舎を移動する生徒たちも伸び伸びしている。学校の緑がこのエリアの景観を美しく守っている



高橋純さん

逗子開成中学・高等学校校長。教頭を経て2012年より現職。「私はなにもしてなくて前任者がすばらしい景観にしてくれました。自分はそれを守っていかなくてはと思っています」



全田和也さん

NPO法人ごかんたいそう代表理事。都内で空間プランニングや広告関係の仕事に就いていたが、逗子の海で子どもが走る姿を目にして心をゆずぶられ、海も山もある逗子で保育園を開きたいと移住



「気持ちのいい地域づくりのお手伝いできれば」と学校長。日々目にする、学校の姿勢、そして地域とのつながりを体験することで、景観に対する意識が育まれていくのではないのでしょうか。

「逗子の海と山が子どもを育てます」

「自然環境の豊かな逗子に、子どもたちのための保育園をつくりたかったんです」という、特定非営利活動法人「ごかんたいそう」が運営する保育園「ごかんのいえ」。2012年に開園した、築80年ほど経った民家を改装した園舎です。古い民家をほぼそのまま使い、庭に木のテラスや遊具を設置してあります。園内には大きな松などの木々があり、周囲に溶け込みながらも、愛らしいづくりの保育園。子どもたちの五感をくすぐるこのたたずまいのなかで、想像力を伸ばして自ら育っていくこと、豊かな個性を育てることを目指した保育が行われています。保育のない時間には、幼児と小学校低学年の子どもたちを対象とした「ごかんのアトリエ」も開かれており、こちらは手仕事や季節感のある遊びを通して、子どもたちの想像力や表現力を育むアートスクールです。「ごかんのいえ」の保育は野外で行います。園舎のある新宿から小坪、披露山、逗子海岸など、行く先々



上：古い家屋を改装した保育園では、テラスも木造。庭には木々が育ち、子どもたちも自然の中で遊ぶ
下：全田さんが大工やデザイナーの仲間とつくった楽しい塀。低くしつらえ、近隣からも好評だ

が子どもたちの遊び場。慣れた自然に入ると、子どもたちの気持ちは安定し、安心して遊ぶのだとか。「子どもたちは木の葉っぱや枝、石ころなどを使って遊び自体をつくりだし、年上の子は自分より小さな子の面倒を見るようになります。そんなところから個性や自尊心が生まれていくのだと思います」と代表の全田和也さん。「逗子には海があり、山がある。小さな子どもたちが日常的に両方を感じることが出来る貴重なまちだと思います。少し大きくなったとき、保育園時代に遊んだ場所を懐かしく思うようになってくれば嬉しいです」。



上：自分たちで考えた遊具や噴水などを模型にした子どもたち。ほととぎす隊景観部会のメンバーとともに記念撮影
左：まちを歩いて、観察して、まちの“なぜ”に気づき、体験して考える子どもたち

ほととぎす隊景観部会でも、小中学生を対象にした「まちづくり学習塾」を開催した経験があります。「身近なまちなかを歩いて遊び場を発見して、作文や模型にして発表するワークショップです。逗子らしい場所はどこか、楽しい遊び場はどんなところか、なぜコンクリートブロックはよくないかなど、子どもたちが自分で考えてくれたんです」と景観部会メンバーの白鳥悦子さん。感性豊かな子どもの頃から、まちの中の“なぜ”に目を向けることから始め、住みやすさや大切な場所に気づき、それらを大事にする工夫を考える学習が必要だと思っています。

■みな共通する心の風景がある

「その土地ごとに人々が体験する景観が、無意識のうちに共有されていると思うんです」

「私が心に痛いのは、一番好きだった鑑摺の岩場が浄水管理センターになってしまったことです。日曜日にお弁当を持って子どもたちと遊びに行くと、岩の間に小さな魚や貝がいて、すごく魅力的な場所でした」と言うのは長島キャサリンさん。ウェールズ生まれのキャサリンさんが、結婚して1965（昭和40年）に逗子に住み始めた頃には、現在の長島邸の周囲

は別荘地で、海岸と並行して通る“屋敷通り”も黒松の並木道だったそうです。「いまでも覚えているのは、当時の選挙のスローガンが“長靴のいらぬ逗子にしましょう”だったこと。道が舗装されていないところが多く、雨の日は泥だらけになるからでした。当時は東京の友人は“遠くて不便でしょう”と言っていました。70年代になると“あんな緑の多いところに住んで羨ましい”と言われるようになりました。考え方が変わったんですね」。

長島邸は田越川に面して1900（明治33）年に建てられた別荘で、現在も松が道に張り出した当時の景観を彷彿とさせます。旧屋敷通り沿いに60年代に増築された部分はミニ映画館となり、右隣にはカフェもあり、昔の面影と現代の暮らしが美しく融合しています。

長島邸が面する田越川の川縁は、いま護岸工事が行われています。拡幅して川沿いの道をつくり、歩きやすい歩道になります。一方、それまで使われていた池子石が取り払われ、コンクリートで固められているので、その石の一部を庭に保管しているそうです。これまでの景観とは異なる護岸になり、「もっと美しくなければいけないのだけれど」とキャサリンさんは言います。ほかにも「逗子の浜辺から見る夕日などの遠景はいいのですが、近景が残念」。日本ではいろいろな建て方をしている家があるので、景観として

は、「それをなにか共通のテーマで結びつけられたらいいのと思います」とキャサリンさん。ほととぎす隊景観部会メンバーであり、建築家・都市設計家の孝一さんは、「それが緑、とくに海岸地区では黒松です。家のわずかな隙間でもいいから、緑を植えてほしい。新たな逗子の“原風景”ができると思うんです。“原風景”というのは、その土地ごとに人々が体験する景観が心の深層まで根づいていて、集団的無意識のうちに共有されているものだと思います。それを都心の基準で景観を考えるのではなく、その土地ならではの景観づくりができればいいですね」。



上：長島邸の一部は、現在ミニ映画館「シネマアミーゴ」と「わかなばんカフェ」となり市外からも人が訪れる。“屋敷通り”の風情を残した心地よい一角
右：長島邸の前から見る10年ほど前の川の景観。長島邸の子どもたちもここで遊んだ



長島孝一・キャサリン夫妻

孝一さんは建築家、都市設計家。逗子文化の会副理事長、ほととぎす隊理事。キャサリンさんはまちづくりコンサルタントとして活躍。横浜市立大学非常勤講師。自宅は逗子市内では文化庁登録有形文化財第一号



■どの家もまちの風景の大切な一部

「まちなみに対する思いを語り合いませんか」

「写真を撮るのもいいのですが、手を動かして風景をスケッチすると、忘れないものですね」と言うのは、逗子生まれの永橋為成さん。スケッチした風景が様変わりして残念に思うこともあると言います。「でも、良いところもまだ残っています。逗子は低層家屋が多く、山の稜線に馴染んだ屋根のスカイラインを目にすると、いいまちだなと思います。昔の日本人は風景を感じて、周囲に配慮して家を建ててきました。緑と水が好きで、狭いところでも木を植え、花を育て、池や水の流れを大事にしていました。逗子は谷戸や路地を歩くと、そうした気持ちで庭を路に開いている家を数多く目にします。そうした素敵なたたずまいは、是非残したいし広げていきたいものです」。永橋さんは、ほととぎす隊景観部会のメンバーであり、NPO法人「逗子の文化をつなぎ広め深める会」（略称：逗子文化の会）の理事長として、逗子の文化をつなぎ広める活動をしています。逗子文化の会では、



永橋為成さん
建築家。逗子生まれ。逗子まちづくり基本計画市民会議委員。逗子文化の会理事長。逗子や葉山などの懐かしい風景のスケッチを長年続けている

このスケッチは、田越川(1998年4月15日)。家と自然の融合が美しい場所を残し、また、今後もつくりだしていきたいと永橋さんは言う

広報誌「逗子の景観まちづくり瓦版」で逗子の景観スケッチや景観に関するコラムを募集して編集したり、逗子市が1年間かけて募集した「逗子ステキ発見、景観フォトコンテスト」に合わせて2013年9月に「景観の祭典、景観シンポジウム」で、座談会・展示会を開催しました。「子育てするなら逗子、老いて住むなら逗子と言える美しいまちづくりを進めて、市民がその人の人生を生き通せるまちにしたいと思ってきました。そのためには、市民が語り合い共感を重ねることが大切です。美しいまちづくりも、現在努力されている人々と共感し合い、気持ちを育て、努力、協働が広がることを念じています。瓦版は継続して月刊で発行されています。逗子の景観スケッチや景観に対するコラムを寄稿いただき、折にふれ語り合いの場を持ちませんか」。

高齢者でも負担なく歩いて通える半径300mくらいの地区の中心に「ふれあい活動センター」のような地域拠点ができると良いと考える永橋さん。「その拠点でまちの景観やより良い暮らしができるまちづくりについて、専門家も交えて考えていける仕組みがつくれればと考えています。逗子に増えつつある空き家が、そういうシステムのひとつになるのもよ

いと思います。私たちはいま、どうしたらもっと心地よい生活ができるのかを考えなければなりません。自然を活かしていく逗子の暮らし方、自然の持つ良さを実感したこと、それらを語り合う。逗子であれば共感してもらえらと思います。その共感のひとつひとつをつないで、新しい試みができ、それがまた別のところで実感されていく。こんなふうに逗子のまちを気持ちよくしていきたいですね」。

■ 家づくりと景観

「最後になりがちな家の外回りですが、住み始めると実はいちばん大事」

門や壁の代わりに樹木や草花を植えるなどして、景観に配慮した住宅が逗子にはたくさんあります。2007年に桜山5丁目に住み始めた榎原さんのお宅も、気持ちの良い暮らしが感じられる魅力的な外構です。まず目に入るのは道路から玄関までの斜面になったアプローチ。「傾斜のある土地を活かしています。平らにしてしまったら、つまらないじゃないですか」

と榎原さん。芝が敷かれ、オリーブやブルーベリー、ハーブなどが植えられた前庭からは、一家がこの家を楽しんでいることが伝わってきます。外構を考えることが家づくりの基本だという思いから、納得のいく設計ができるまで8ヶ月かかったというもうなずけます。

榎原家のシンボルツリーとなっているヤマモミジの木は和の雰囲気のある建物に合わせて選んだそう。「秋になると紅葉し、近所の方も楽しみにしていると教えてくださいありがとうございます。そんなところからお話するようになったご近所さんもありますよ」。

居間から続くウッドデッキでは、友人や近所の

人々を招いてバーベキューをすることも。木製の柵にはツタを這わせ、緑化と同時に道路からの目隠しにもなっていて、まちに対する開放感があると同時に、プライベートも守られています。

「庭はまちとつながる場所。ネット上でつながるサービスを“ソーシャル・ネットワーク・サービス”と言いますが、庭を通じてつながる“ソーシャル・ガーデン・サービス”というのがあってもいいんじゃないかな、と思います」。

外構のしつらえひとつで、まちと人とのコミュニケーションが生まれているのです。



榎原さんファミリー
横須賀出身の薫さんは雑誌編集の仕事で、海外生活を経て、現在は週のうち半分を自宅で、残りを都内に通勤。横浜市出身の恭子さんは都内勤務。輝也くん10歳、智也くん7歳



前庭の斜面の芝生は子どもたちの格好の遊び場



エントランスの階段脇にもみじのシンボルツリーを植え、斜面を芝生に。「建てるときに外構も考えた」という榎原さん邸



居間の延長のようなテラスは、外の気配を感じながらも道からは見えないうつくり。夏にはさらに柵が緑で覆われる。夏はBBQ、冬は焼き芋と、家と外の間の空間を楽しむ



駐車場の後方に位置するテラスの下は納戸になっていて、自転車置き場になっている。家まわりがすっきりする工夫のひとつ

外構ビフォーアフター

家を建ててしまった後から、外構のしつらえを自分で工夫しようとしても、なかなか手がつけられない、という人は多いはず。桜山に住む山崎さんと岡部さんは、市の助成事業を利用して、実際に家の外構の緑化をしました。2008年にほぼ同時に越してきて以来、家族ぐるみのおつきあいだという両家が同時に沿道緑化をすることで、連続性のある景観が生まれました。その取り組みを紹介しましょう。

■隣同士で取り組むことで連続性のある景観に

「なかなか手をつけられなかったけれど、やっぱり、やってよかった」

———どのようなきっかけから緑化事業に応募されたのでしょうか。

山崎みおさん：家を建てたときは予算的な問題もあって、外構は後回しにしたまま。なんとかしたいとずっと気になっていました。

岡部廣子さん：うちも同じ。自分たちでやろうと思っていましたが、思っているだけで手をつけられませんでした。

岡部健彦さん：本当は家を建てるときに外構に関するビジョンもちゃんと持っていたほうがいいんですよね。自分はDIYが好きなのでウッドデッキは自作したんですが、後は手がまわらないですね。いろいろ考えてはいたんですが。

山崎和宏さん：いろんなところにお金を使ってしまうから、外構に関しては後でもいいと思ってしまったんですね。

まちづくり課：山崎さんのお宅を拝見したとき、お隣の岡部さん宅と連続性を持たせることで、美しい景観になる可能性があると感じました。

岡部廣子さん：プロの手にかかったらうちがどう変わるんだろうっていう興味がありましたね。

岡部健彦さん：山崎さんから一緒にどうですかというお話をいただいて、これはぜひ便乗したいと(笑)。

まちづくり課：壁面緑化、ベンチの設置などの提案があったときは率直に、どう思われましたか？ とくに岡部さんのお宅は角を壊さなくてはいけないし、山崎さんのお宅ではコンクリートの土間の一部を削ることになりましたけど。

岡部健彦さん：あの場所は高さがあったので、子どもが落ちると危険。木があるといいなって思っていました。

山崎みおさん：うちはコンクリートを打ったばかりだったので、極力残してください、って(笑)。それまで使っていた枕木が岡部さんのお宅で再利用されることになったのは、嬉しかったです。

「利便性を壊さなくて緑化できる。機能と景観がちゃんと両立できるんですね」

まちづくり課：小さなスペースだとなにもできないと思っている人は多いんです。でも狭くても木一本くらいは植えることができるし、それが無理なら壁面の緑化もできるし、その少しの工夫で劇的に景観が変わることを証明できたと思います。いまはまだ植えたばかりで少し寂しいですが、数年経てば木々が成長し、もっともっと良くなりますよ。

今回は自転車をどう置かもテーマのひとつでした。駐車スペースはみなさん最初から意識されるのですが、自転車のことは後回しとなることが多いので。

岡部健彦さん：これまでの生活の利便性を壊さずにやっていただいたことがいいですね。自転車を置くスペースをすべて緑化したら、景観は良くなるかもしれませんが、使い勝手は悪くなるかもしれない。機能と景観がちゃんと両立できているんです。

山崎みおさん：うちのベンチのアイデアも見た目だけではなく実用性を備えています。子どもの友だちが遊びに来て座ったり、顔見知りのご近所さんがひと休みに使ってくださいたり。これから憩いの場になっていくのかな、と。荷物の一時置きにも役立っています。

———シンボルツリーを植えた感想は？

山崎みおさん：どんな木にするかいろいろ考えましたが、日当たりのこともあるので、プロの方に聞いて選びました。葉の色が季節によって変わって楽しめたり、何月に何色の花が咲くのかもポイントでした。シンボルツリーがある家をうらやましく思っていたので、本当に嬉しいです。

まちづくり課：日当たりのことだけでなく、大きくなりすぎないことや虫がつきにくいなど、メンテナンスが楽なことも考慮して木を選びました。伸びたからとすぐに切ると、逆におかしな枝張りになるので、ある程度放っておいたほうがいいですね。木を植えると後々手入れが面倒だと思っている人がいらっしやるかもしれませんが、

Before



手前が岡部邸、その隣が山崎邸。山崎邸は枕木を使って外構を工夫しているが、全体に無機的で寂しい雰囲気

After



外構工事が終わった2軒は、角地にある岡部邸の自転車置き場が緑化され、岡部邸へと緑が連続するようになった。これから緑の成長が楽しみです。

岡部邸



緑がなく、無機質で寂しい印象の玄関周り



玄関ポーチを一部削り、ソヨゴの株立ちを植えたことで、家の正面に表情が生まれた



側面の壁が素っ気ない印象で、地面には雑草。自転車もごちゃごちゃと置かれている印象



枕木とリュウノヒゲを交互に設置。壁面も緑化。自転車を置いてみきれいに見える



岡部健彦さんは横浜市出身、川崎市内勤務。廣子さんは逗子出身。拓磨くん8歳、祐輝くん5歳



東京出身の山崎和宏さんと生まれも育ちも逗子のみおさん。ともに都内勤務。海来くん6歳、汀夏ちゃん3歳

山崎邸



枕木でエントランスがデザインされているが、少し寂しい印象



枕木のイメージを壊さずに緑を増やしたことで、玄関先の表情が一変した

樹種を選べば大丈夫なんです。多くの方がそこを理解してシンボルツリーを植えてくれるとまちなかの潤いが連続し、素敵なまちなみが増えていくでしょうし、そこを期待したいですね。

岡部廣子さん：実際に木が植えられたのを見て、子どもたちも嬉しいみたいです。お友達を連れてきて「ほら見て」って。

山崎みおさん：緑があるだけで家の見栄えがグンとアップしますね。

岡部健彦さん：これからは子どもの成長と合わせて木が成長してくれるはず。ちゃんとみんなで考えて植えたんだよ、ということ子どもも知っているの、心にも強く残り、愛着を持ってくれると思います。

工事の流れ 打ち合わせからできあがりまでのプロセスを紹介します。

1



専門家とともに、イメージをすりあわせ、植木の種類や取り壊す部分などを確認していく



ほととぎす隊景観部会の専門家とまちづくり課が描いたスケッチ。岡部邸では自転車置き場にパーゴラをつける案もあった

2



岡部邸の側面を掘り起こし、ポーチの一部も取り壊す

5



いよいよ緑が植えられる。気候や風土にあった植木で、なかつ手間がかからない植木の中から選択

3



岡部邸・山崎邸の双方を同時に工事。連続した風景をつくる

6



壁面緑化用のパネルを設置し、これから緑が徐々に植えられていく

4



山崎邸では、枕木をとりはずし、ベンチを設置。枕木の一部を岡部邸に再利用

7



両家の間には、低木のヨーロッパゴールド、地面にはアジュガを植栽。境界が柔らかな雰囲気になった

完成後のディテール

山崎邸



山崎邸の玄関からみた外構。シンボルツリーは常緑ヤマボウシ。大きくなりすぎず、手がかからず、逗子の気候にも合っている。いくつもの樹種を検討して選んだ



山崎邸のベンチの背後に植えたのはジャノメアメリカ。高さの違う緑が重なりあうことで、抜け感があると同時に豊かな雰囲気になる

岡部邸



岡部邸のシンボルツリーはソヨゴ。ポーチぎりぎりに植えたことで転落防止にもなり、安全性も増した



壁面緑化に使ったヘデラ・グレイジャーは、班入りアイビーの代表種。常緑なので、一年中緑の壁を楽しめる。「枕木が捨てられることなく、お隣に使われているのが嬉しい」(山崎みおさん)。



子どもたちも同年代で普段から交流のあるお隣どうしの山崎家と岡部家。家の前の車通りのない私道でミニパーティをすることもあるという。通る人々も声をかけあう、ご近所づきあいが密な暮らし。

山崎邸外構リフォーム費用

門柱部分枕木解体工事(枕木再利用)	20,000円
ベンチ設置工事(ヒノキ防腐塗装)	32,000円
玄関脇土間一部解体(コンクリートガラ処分)	65,000円
シンボルツリー設置(常緑ヤマボウシ株立ち1本、支柱含)	43,700円
側面(ヨーロッパゴールド5,600円×8本、支柱含)	44,800円
側面隙間(アジュガ730円×20ポット)	14,600円
ベンチ奥低木(ジャノメアメリカ1,500円×5本)	7,500円
ベンチ下地被類(イペリス2,500円×2株)	5,000円
客土(黒土)	10,000円
資材運搬費用	10,000円
諸経費	50,000円
合計	317,730円 (消費税5%含)

岡部邸外構リフォーム費用

壁面緑化用ネットフェンス設置工事	60,000円
玄関ポーチ一部解体工事	54,000円
枕木設置工事(再利用)	34,500円
シンボルツリー設置(ソヨゴ株立ち1本、支柱)	37,000円
シンボルツリー下(フィリフィアオーレア14,000円×2株)	2,800円
枕木隙間(タマリユウ5,500円×3ケース)	16,500円
壁面緑化(ヘデラ・グレイジャー班入り1,800円×6株)	10,800円
駐車場脇(アセビ1本)	10,000円
客土(黒土)	8,000円
資材搬入運搬費	6,000円
諸経費	30,000円
合計	283,080円 (消費税5%含)

実践のヒント

逗子の景観を構成している一番大きな要素は住宅です。どんなに小さな建物でも、みなさんが共有する風景の大切な一部です。各家庭がまちの景観づくりを心がけることで、美しいまちなみデザインができます。ここではあなたの家のまわりからすぐに始められる景観への取り組みのヒントを紹介します。小さくても家の周りを変えていくことが、美しい家なみをつくり、快適な街路空間をつくり、あなたの地域のまちなみデザインへとつながります。

前庭とシンボルツリー

道路際までぎりぎりに家を建てるのではなく、玄関と道の間に少しスペースをつくりましょう。家の前に添えられた緑は、道行く人の目に安らぎを与えます。季節の彩りを感じる樹木や草花はのどかな気持ちを誘います。道路の見通しも良くなり、死角をつくらないので、防犯効果もあります。逗子では、玄関や庭に「シンボルツリー」を植えることを奨励しています(助成制度あり→p45参照)。木陰がまちの潤いも生み出します。虫のつきにくい手入れしやすい木を選びましょう。

壁の緑化

ツル植物などでちょっと壁を緑化するだけで、道行く人の目を和ませることができます。(助成制度あり→p45参照)

駐車場の緑化

駐車スペースは家の間口の近くにあることが多いのですが、地面を少し緑にするだけでもまちの潤いが生まれます。

小さな優しさ

道行く人が少し休憩できるようなベンチを置いてみませんか。そこから小さなコミュニティが生まれます。

自転車置き場

駐車スペースだけでなく、自転車置き場もつくりましょう。どこにでも置いてしまうので無造作になりがちですが、少し目隠しを設ければ防犯にもなり、まちなみもきれいに見えます。

隣家との境も庭と考えて

狭いお隣との間隔も庭と考えてみませんか。風通しや日当たりが良くなり、道からの見通しも良くなります。よく片付けられた狭い隙間に庭の灯りや、ちょっと添えられた緑が広がりをもたらします。

ブロック塀を生垣に

コンクリートブロック塀は老朽化すると地震などで倒壊し、下敷きなどによるけがの危険性が高いといえます。コンクリートブロック塀を生垣に変えませんか？(助成制度あり→p45参照)生け垣の緑は道に潤いを与え、安心・安全で散歩も楽しくなります。

塀や柵の高さと素材

塀や柵を設けるときは道路を見通せるくらいの高さにして、できるだけ自然素材にしたいものです。道の景観が楽しくなるうえに、背景にある山々の緑と調和してまち全体が美しく見えます。

小さなスペースを楽しいスペースに

まちの景観はゆとりをどう使っているかというところが出てきます。わずかなスペースを楽しく使いましょう。郵便ポストや玄関脇などの家の前や窓際、ドアなどにちょっと花を飾るスペースをつったり、家の前に植木鉢を置くなど、楽しい工夫がいろいろできます。

調和する色彩

逗子の特徴は、まちを取り囲む豊かな丘陵や海岸など自然の色彩と、穏やかで暖かみのある建物の色彩が基調になっていること。ひとつの建物だけが目立ってしまうようなまちなみよりも、全体に共通する心地よい雰囲気があり、豊かな自然が鮮やかに映えるまちなみのほうがずっと魅力的です。

遠くから見ても、気持ちがいい家

高いところから下を見下ろすのはとても気持ちがいいものです。しかし、高いところにあるものはとても目立ちます。山の中腹にある家、「あれがなければ…」と思ったことはありませんか？高いところに建てる家ならば、周囲の山々と違和感のない建物がいいですね。

斜面緑地の保全

斜面緑地は子どもにとって大切な景観要素です。しかし、近年、山肌が削られ、コンクリートで固められた法面が目立つようになってきました。崖は山を削って宅地をつくるから出来てしまうもの。無理な開発をやめ、山を削らないようにしたほうが、自然環境としても良いのではないのでしょうか。

家の屋根を見上げてみよう

家を見上げたときに、屋根が遠くに見える丘陵や海との調和が図られていると、美しい家になります。背景にある丘陵と屋根の勾配が同じだと、なんとも和やかな景観になります。勾配屋根が日本の風土にふさわしく、また、軒先がそろっていると、さらに品格が生まれます。

日当たりと風通し

隣地との間は空間をしっかり取りましょう。近隣への気遣いであると同時に、風通しや日当たりがぐっと良くなります。

まちの活動拠点

住宅地の中にちょっとほっとするカフェもちらほら生まれています。地域の大切な情報拠点なるコミュニティスペースの役割をこうしたカフェが担っているとも言えるでしょう。地域ごとに個性豊かな活動拠点をつくっていきましょう。

共同のゴミ置き場

ゴミ置き場が歩道からはみだしている歩行者を妨げない工夫をしましょう。近所どうし協力して、きれいに保つ気持ちも大切です。

古い建物を活かして暮らす

まちには古い建物が少なくなってきましたが、魅力を見直し、再利用して住んでみませんか。古い建物を活かす利点は、まちの歴史や景観を損なわずに、新しい暮らし方ができることにあります。古家の雰囲気そのまま活かしたお店もよく見かけるようになりました。

角の隅切り

敷地の角の塀は隅切りしましょう。角が直角に近いと、道行く人や車にとっては見通しが悪くなり、とても危険です。細い路地から車の往来が激しい道に出る角のお宅はとくに工夫が必要ですね。人の目線に配慮しつつ緑をしつらえることで、街角がとても美しくなります。

暮らしの灯りがあふれる街路

夜道では、人は家の外灯や家の中からもれる光を見ると安心します。防犯のためとって高い塀で家をガードすると、家々の温かさを感じない暗い道となってしまう。道に面した境界を閉じるよりも、むしろ開くことで視認性が高まり防犯効果があります。暮らしの灯りがあふれる街路が増えれば、安心・安全なまちになります。

家の脇

道路から見える家の脇も景観の一部です。ゴミや不要なものを置きっぱなしにすることで景観を損ねていませんか？狭いスペースでも花や木を植えたりとさり気ない工夫をするだけで、道から見える家がきれいに見えます。

まちかどのワンポイント

まちかどは景観上重要なワンポイントになります。敷地の角を美しく緑化したり、開かれたポケットパークのような庭にして美しいまちづくりに貢献してみませんか。また、ちょっとしたスペースにベンチを置いてくれている家も見かけます。まちに対する優しい気配りですね。

ポケットのようなまちのスポット

まちのどこどこに、人がちょっと休憩したり、井戸端会議をしたりできる場所があるといいですね。井戸を近隣の人たちに開放している家もあります。災害が起きたときに多くの人が使えらるよう、まちに開いているといいですね。

まちと商店の間のスペース

カフェなどでほっと一息つくときに、まちを眺められたらどんなにいいでしょう。歩道と店の間の小さな空間でも、そこはまちに開かれたコミュニティスペースになります。そんなお店とまちの関係が心地よさを生むのではないのでしょうか。

地域に根付いた商店

地域特性に合わせた地元ならではのお店は、貴重な存在です。行き交う人と日常的に笑顔を交わせるよう、道に開かれたお店づくりを心がけたいものです。

樹木を残しながら暮らす

大きな樹木はまちの歴史を物語るもので、周囲の人々に親しまれています。新しい家を建てるときにも、なるべくそうした木々を残していくことを考えたいですね。

街灯

街灯は夜のまちに安全だけでなく、まちにリズムをつくりだすものでもあります。煌々と真昼のように照らすのではなく、まちがしっとりとするような、そんな街灯があちこちにあるといいですね。

雨のしみ込む地面

アスファルトやコンクリートなどの舗装で固めると、雨水がすぐに川や下水に流れ込み、災害の原因になります。雨のしみ込む地面をできるだけ多くしましょう。ちょっとした植え込みをつくったり、透水性ブロックで舗装することで、雨水が地面にしみこみ、災害に強いまちをつくることができます。

まちなかの駐車場

駐車場は便利ですが、まちなかに増えると殺風景になります。周りに樹木を植えたり、生垣や石垣の背後にすることで車が直接見えず、うるおいあるまちなみになります。また、地面を全面コンクリートにせず、雨水が地面に浸透する緑化舗装などすることで環境にも優しくなります。

公共スペース

公園や公共の建物など、あなたの地域の公共スペースを上手に使いましょう。より良い使い方について地域で話し合い、もっと素敵な場所になるように育てていくことができるはずです。

美しいまちづくりのための地域活動

街路脇の花壇や公園緑地などを市民が里親になって手入れするアダプト制度(P23～25でも紹介しています)があります。あなたの地域を美しくするための活動に参加していませんか？

まちを眺めるということは、それがどんなにありふれた景色であっても、とても楽しいものです。まちを構成する要素のひとつひとつは決して切り離されたものではありません。私たちはいつも、まち全体の雰囲気を感じているものです。

ところが同時に、私たちが見ているものはまちの断片でもあります。ひとりひとりの異なる出来事、周囲の環境、そして自分自身の過去の経験とともにまちを感じているのです。私たちは誰でも、自分の住むまちのどこかに親しんでいて、その長い間の記憶がまちへの愛着を生み出しています。

海や山や川は、私たちが生まれる前からこの場所

にあったものです。人はその地形の上に生活のために家をつくったり、店を開いたり、橋をかけたり、道路をつくったりしてきました。まちは、働き方や生活の仕方が異なるさまざまな人々が作り出す事柄で成り立っていて、自分なりの理由から、休むことなく手を加えています。まち全体は安定しているように見えても細部から生まれては消え、それを繰り返しながら変化していきます。

日常的に暮しているからでしょうか、私たちは住む場所の景観とその価値に無頓着になりがちです。でも、旅行に行ったときには、調和のとれた風景に出合って驚きの声をあげたり、心地よさを感じたり、

そこに住むことを夢見たりしているのではないのでしょうか。もしも、逗子に来る人が、同じような驚きや憧れを感じてくれたなら、このまちに住んでいることをもっと誇りに思えるのではないのでしょうか。

まちは自然の地形や風土、文化などを活かしながら、人々が時間をかけて育てていくものなので、美しくするには継続的な取り組みと、長い年月がかかります。そして、その地道な取り組みが、生活する上での喜びとまちの価値につながります。

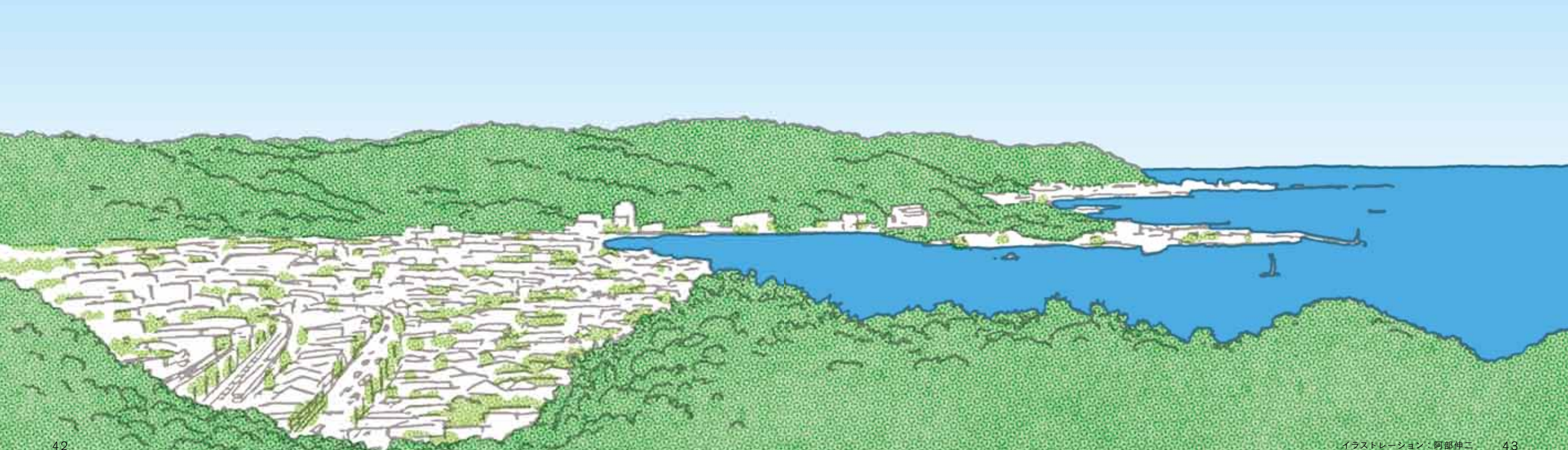
それぞれの人が持つまちへの誇りと自負が、良いまちを育てていきます。ひとりでできること、みんなでできること、その力の集合が、まちなみをより美し

くつくりかえていく可能性をはらんでいるのです。

より美しいまちなみをつくるには、小さなことからでも始められます。自分の家とそのまわりをきれいにすることもそのひとつです。その小さな変化の積み重ねが、やがて誰もが住み続けたいと思える美しいまちをつくり出すことでしょう。

まちはいろいろなものごとが重なり合い、結びついてくことでかたちづくられています。だから、あなたにできるひとつのことからでもいいのです。

さあ、まちなみデザインを始めましょう。



ほととぎす隊景観部会・市役所ができる景観サポート

心地よく美しいまちをつかっていくには長い年月がかかり、根気があるものです。そんな活動も仲間と一緒に活動したり、専門家のサポートを受けることで楽しく進めていくことができます。ここでは私たちができる景観サポートや補助制度を紹介します。

まち歩き

毎日、何気なく通っている道も、見方を変えれば新しい発見がたくさんあります。カメラを持って一緒に歩いてみましょう。スケッチをしてみましょう。直感的に思わずシャッターを切りたくなったり、筆を走らせなくなる風景。それがきっとあなたが考えるまちの魅力です。また、まちの歴史や景観に詳しい人と歩くことで、普段ひとりでは素通りしてしまう場所に素敵な再発見があると思います。市では定期的に逗子の素敵な景観を巡るまち歩きを開催していますので、ぜひ一緒に歩いてみましょう。



ワークショップ

わがまちの魅力を発見したら、それをワークショップで考えてみましょう。たくさんの仲間とまちの未来を話し合ったり、まちの図面や模型をつくったりして、とても有意義で楽しい時間が過ごせます。私たちは豊富な経験を生かし、そのコーディネイトをします。子ども向け、自治会向けなど、いろいろ対応できます。

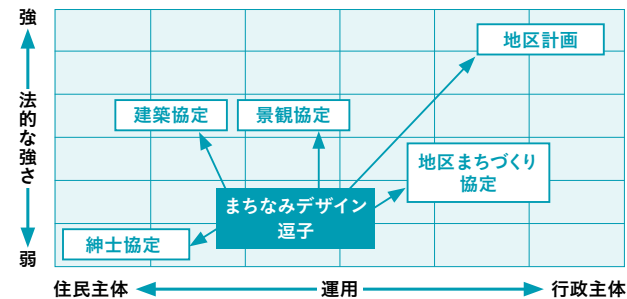


まちのルールづくり

まちなみデザインのためのルールづくりのお手伝いをします。お隣近所2軒から、自治会単位までまちのルールを決めることができ、さらに法的な効力を持たせることもできます。たとえば、敷地の大きさや建物の配置、樹木の量や配置を決めたりすることができ、そのルールも紳士協定のような自由度の高いものや法的拘束力の高いものまでさまざまです。

私たちは、ルールを決める方法を一からサポートします。この『まちなみデザイン逗子』を読んで、まずは自分たちの考え方を整理してみましょう。

【参考】まちのルールづくりのいろいろ



【紳士協定】根拠法令なし
2軒から協定締結が可能で、自主的な話し合いで決定します。比較的簡単に締結できますが、法的拘束力はありません。

【建築協定】建築基準法
協定者の話し合いで決定し、神奈川県が認可します。成立には住民全員の合意は必要ありませんが、合意者のみに効力が及びます。所有者が変わっても効力は引き継がれます。

【景観協定】景観法
一団の土地所有者等の全員の合意により、当該土地の区域における良好な景観の形成に関して締結される協定です。

【地区まちづくり協定】逗子市まちづくり条例
3,000㎡以上の住宅地において、市が締結します。協定の成立には地区内居住者等の2/3が必要で、効力は地区全体に及びます。期間は10年ですが、地区内の過半数の人からの異議がなければ更新されます。

【地区計画】都市計画法
3,000㎡以上の住宅地において、住民等の意見を反映し、市が許可します。地区内のすべての土地・建物等に効力が及び、変更や廃止をしなければ、効力は永久に続きます。建物を建てる場合等には、市への届出が必要となり、適合しているかどうかの審査があります。

補助制度のご案内

緑の助成制度

緑はまちなみに四季おりおりの彩りを与えてくれ、私たちの心をなごませてくれるだけでなく、騒音をやわらげたり、空気をきれいにしてくれる働きもあります。

また、樹木は水分を多く含んでいるので、万が一火事が起こっても火が燃え広がるのを防ぐなど、防災上からも優れた効果を発揮します。

●生垣助成制度

生垣用の樹木を無償配布します。ブロック塀などを取り壊して生垣をつくる場合は、撤去費用の一部も助成します。

●シンボルツリー助成制度

シンボルツリー用の樹木を無償配布します。住まいに個性を与え、まちに潤いを与える樹木を植えましょう。

●壁面緑化助成制度

道路などから見える建物の外壁、バルコニーなどにツル性の植物をはわせて緑化をする場合、費用の一部を助成します。

※詳細なパンフレットは、別に用意していますので、詳しくは市役所緑政課にお問い合わせください。



景観アドバイザー派遣制度

景観形成に関する市民活動について、アドバイスを行う専門家派遣制度です。建築家、造園家、カラーコーディネーターなど、豊富な知識を持った専門家から直接アドバイスを受けることができます。

※この制度は、自治会や市民団体への派遣制度です。個人でのお申し込みはできません。詳しくは市役所まちづくり課にお問い合わせください。



景観サポーターの募集

景観形成に関する活動や事業の企画立案などを市民協働で行い、景観まちづくりを推進していくために、景観に興味があるみなさんに登録していただく制度があります。登録後は今後予定している景観に関するイベント情報のご案内をします。

▶ 詳しくは市役所まちづくり課にお問い合わせください。

E-mail: machi@city.zushi.kanagawa.jp

Tel: 046-873-1111

Fax: 046-873-4520

ほととぎす隊景観部会について

逗子市のまちづくり条例に基づき、市民参加・参画による「計画的なまちづくりの推進」を進め、平成18年12月25日にまちづくり基本計画を策定するに至りました。

この計画に参加した市民は2年以上に及ぶ勉強会やまち歩きなどを実践してきました。

市民が望む30年後を見据えた「まちづくり基本計画」は、市民による積極的なまちづくりへの参加と推進、そして主体的に取り組むことを市民の責務としています。

これを踏まえ、この計画に関わった市民等により「まちづくり基本計画」を見守り、育てていく組織として「ほととぎす隊」が立ち上がりました。

ほととぎす隊景観部会は、まちづくり基本計画第2章II『風致・景観の向上により、にぎわいとくつろぎがうまれるまち』を推進させることを目的として活動しています。

また、この「まちなみデザイン逗子」を基にして、逗子のまちづくりを具体的に進めることを目的とした、景観サポーターです。

「まちづくり基本計画」における景観の基本理念

逗子市の都市宣言である「青い海とみどり豊かな平和都市逗子」の実現を目指すために、「逗子らしい景観は市民の共通財産である」との認識のもと、「景観」をまちづくりの重要要素として位置づけている。市民の多様な参加と参画により「自然景観」および「人工景観」の向上を図り、風致に富み、景観に優れた「コンパクトシティ」としての質の向上を目指していく。

具体案と景観の判断・評価基準

逗子のまちなみが「自然のままの景観」と「人間がつくりだす景観」の調和と創造的向上を図り、低層を主体とした逗子らしいたたずまいの美しいまちをつくるためには、そこに住む人にも訪れる人にも優しく、そぞろ歩きが楽しい海辺のまちであり、人間らしいしつらえのにぎわいと安らぎが生まれるまちを景観の判断・評価基準と考え、その具体案を以下に掲げる。

安心できる空間がある

- 見晴らしが良いなど自分の位置が容易に確認できる。
- 通過車両を比較的少なくし、歩行者専用空間を有する。または歩車分離が徹底している。
- 防犯・防災上の観点から、ブロック塀の後ろなどの死角をつくらない。
- 休憩できるベンチ・芝生等があり、公園・オープンスペース等の広場を有する。
- 歩道が広い、または看板・広告・電柱等が歩行の邪魔にならないなど、生活道路が安心・安全で圧迫感がないこと。

文化的な空間がある

- 山や森などの自然が眺望できる。

- 河川、街路樹、生垣などの自然に触れることができる。
- まちの統一イメージ・ビジョンを有する。
- 文化、伝統と歴史豊かなまちなみの保全を基本とする。
- 地域特性(自然・気候等)に即した住居空間が整備されている。
- コミュニティが息づくまちの要素を育てる。

調和のとれた空間がある

- 丘、河川、緑地などの自然環境の中に構築物が違和感なく存在し、日照・通風がある。
- 駐車・駐輪場、公共施設、商業施設等がまち中に機能的に配置されている。
- 沿道に面しては、開かれた庭づくりとし、連続した統一性のあるまちなみとする。
- 建物の配置、屋根の高さや素材・色彩などは、気候風土が考慮されたものとする。
- 魅力ある街路と街路樹がある。
- 後背に広がる緑の稜線が望め、見渡すことができる。
- 海岸線は風致に富み、自然の普遍性を損ねることのないものとする。
- 建築物の個別デザインより地域デザインを優先する。
- 建物、歩道、装飾物、記念碑、彫刻等に地域の関連性・一体性がある。

おわりに

ほととぎす隊の「ほととぎす」とは、逗子市が制定する市の花です。明治の文豪徳富蘆花もまた、逗子を舞台に小説「不如帰(ほととぎす)」を書いています。その中に描かれている海や山は私たちの大切な資産です。

まちの景観は市民ひとりひとりの意識と行政とが一体となってつくりあげていく必要があると私たちは考えています。

この冊子が、自分たちの家や近所のあり方や暮らし方から逗子全体の景観について考え、そして実践するきっかけになればと願っています。

素敵なまちを目指して、次の問いかけを私たちと一緒に始めてみませんか？

- 逗子は住みやすいまちですか
- 住み続けたいと思うまちですか
- 逗子に愛着をお持ちですか
- 逗子は誇りを持てるまちですか
- 逗子は魅力のあるまちですか
- あなたの心の中に刻まれている逗子の風景はなんですか
- あなたにとって美しい逗子はどこですか
- 居心地のよい場所がありますか
- 買い物や通勤・通学で歩く道をどう感じていますか
- 好きな散歩道はありますか
- 近所に好きな場所はありますか
- 写真を撮りたくなったり、スケッチしたくなる場所はありますか
- 友人と会う場所や、友人を案内したくなる場所はありますか

お問い合わせ

逗子市まちづくり課

E-mail: machi@city.zushi.kanagawa.jp

Tel: 046-873-1111 Fax: 046-873-4520

facebook 逗子の景観まちづくり

<https://www.facebook.com/zushiscape>

冊子はたくさんの方々のご協力によってつくられました。
取材や撮影にご協力いただきました市民のみなさまに
心より御礼申し上げます。

ほととぎす隊景観部会及び協力者(50首順)

雨宮郁夫	永橋為成
井尾祥子	花田政恒
石井達郎	日高仁
井原洋子	福岡義夫
今井佑一	古谷雄一
及川洋一	前北和男
岡安博	松岡安宗
神戸義勝	松本寛
木村玲子	室伏多門
白鳥悦子(代表)	山岸達矢
田中尚武	山田あさ
長島孝一	若狭秀巳

編集 柴牟田伸子[SJ]
及川佳寿美
日高仁[SLOWMEDIA一級建築士事務所]
三澤正大[逗子市まちづくり課]

デザイン 阿部太一[GOKIGEN]

撮影 橋本裕貴(表紙、グラビアほか)
*その他、市民等が撮影した写真を使用しています

発行日：2014年3月20日



『まちなみデザイン逗子』は、財団法人自治総合センターの「活力ある地域づくり助成事業」を活用し、作成しました。

